

発表題目：

多民族地域で文化を再創造する

—インドネシア地方社会にみる民族寛容性と同胞意識の形成・共有—

所属： 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

氏名： 二重作 和代

1200 字程度で発表内容を記載してください。

インドネシアは様々な民族を「インドネシア人」として統合してきたが、国民が抱える多種多様な差異によって社会的な衝突が垣間見えるようにもなった。とりわけ民族は、インドネシア社会を理解する上で重要な社会的単位となってきたが、民主化および地方分権化以降は、各地方において民族の枠組みを超えたひとびとのつながりも顕著になっている。本発表は、多民族地域のひとびとが民族をどのように捉えているのか、そしてどのような同胞意識を共有し、民族境界線に囚われないつながりを形成するのかを、オン・オフラインでなされる文化実践や表象から考察を試みる。

本発表は、インドネシアのスマトラ島南東部沖合に位置する、バンカ島とブリトゥン島およびその他の諸島から成るバンカ・ブリトゥン州（以下、バベル）を対象とする。当地は 18 世紀以降世界的な錫産地として知られ、鉱山開発の労働力として中国本土やインドネシア他地域から多種多様なひとびとが流入し、定住してきた。2000 年に南スマトラ州から新州として分立する際には、エリート層が初めて公的に地域文化を定型化・規範化し、ムラユ文化を同州独自の文化として位置付けた。

2008 年以降観光地化が進む同州では、観光ブーム当初に観光資源とされてきた自然の風景に加え、現在はバンカ・ブリトゥン人（以下、バベル人）という同胞意識の基礎となる地域文化も観光資源となっている。観光客は、直接見聞きしたものだけではなく、オンラインの写真などに対してもまなざしを向ける[アーリ 2014: 281-291]。これまで当地でも、観光客のオン・オフラインでの多様なまなざしを通して、彼らの嗜好に偏った観光資源が再生産されてきた。しかし一方で同時に、観光従事者はこのような意図せざる観光資源の再生産に抵抗している。彼らは地域文化を再考し、当地に定住する多民族によって構成されるバベル文化を、観光客にイベントや展示物などを通して提示している。ここではエリート以外の地域住民も、地域文化の再考や再創造に関わっていた。加えてオンラインでも、SNS での情報発信や、オンライン会議ツールを用いたホスト間でのワークショップなどが展開されている。これらは、州政府がトップダウンに行ってきたのとは異なり、オン・オフラインでの文化実践を通して、ボトムアップで同胞意識が自覚され、共有されている点で興味深い。民族間の境界線が緩やかである当地の民族寛容性の高さが、バベルの地域文化や同胞意識の特徴である。

本発表では、バベル人がどのように地域文化や同胞意識についてオンラインで発信するのかを、観光以外の文脈からも検討したい。例えば Twitter では、バベル文化や歴史に関する情報、個人の見解が投稿されている。新型コロナウイルス感染拡大によって、人間の生活空間はオンラインへ一層拡大されつつあるが、これはバベルも例外ではない。オンライン空間に着目することで、従来の調査では拾うことができなかったナラティヴや、地理的・時間的制約に囚われない文化実践から、上述の地域文化や同胞意識が広く地域住民間で共有されていることを明らかにする。

アーリ, ジョン・ラースン, ヨーナス. 2014. 『観光のまなざし (増補改訂版)』加太宏邦訳, 法政大学出版局.